創世記3章8－24節 「主のいのちから離れた人」

1A 主を避けるアダムとエバ 8－13

1B 園を歩かれる主 8－10

2B 責任転嫁 11－13

2A 主の呪い 14－19

1B 蛇への勝利 14－15

2B 産みの苦しみ 16

3B 苦しむ労働 17－19

3A エデン追放 20－24

1B 皮の衣 20－21

2B 東を守るケルビム 22－24

本文

創世記 3 章を開いてください。午前礼拝で私たちは 1 節から 7 節まで見ました。なので 8 節から最後、24 節までを見ていきたいと思います。エバが蛇の惑わしを受け、善悪の知識の木から実を取って食べました。アダムは、主から食べてはならないと命じられていたのに、それを食べて、罪を犯しました。聖書が、贖い、あるいは救いの物語と呼ばれるのはこれ所以です。神のかたちに造られ、祝福を受けるように造られた人が、神から離れてしまって呪いの下に置かれています。しかし、主がそこからいかに人をご自身のところに取り戻すのか、回復させるのか？というのが、聖書全体に流れる、実に黙示録に至るまでの一大物語です。（もちろん、物語といっても架空の話ではなく、歴史的に事実として起こったこと、またこれから起こることを語っています。）

1A 主を避けるアダムとエバ 8－13

1B 園を歩かれる主 8－10

8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である主が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

大きな悲劇が起こりました。「そよ風の吹くころ」「神である主が園を歩き回られる」というのは、主がエデンの園に住まわれる姿をよく表しています。そこには、主ご自身の慈しみ深さ、その素晴らしさ、栄光が満ちています。

2 章でエデンの園の姿を見ました。見るに良く、実を食べるのによい木々が生えています。中央から四つの川が流れています。一つの川は、その流れで金の採掘ができます。アダムは、そこで土地を耕し、守っていました。そして、動物が連れて来られて、アダムは名前を付けていました。さ

らに、女がアダムから造られました。ふさわしい助け手であり、妻です。そして何よりも、そこには主ご自身がおられて、心地よく住まわれているのです。この「そよ風の吹くころ」というのは、中東では午後下がり、夕方に行く時の時間です。暑さが収まり、涼しさが少しやってきている時です。

互いに裸であることを知らなかった時、二人は、主なる神のところにそのまま近づいたことでしょう。これこそが、神との交わりでした。ところが、その真逆のことが起こったのです。彼らは、「神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した」とあります。主の御顔は、恵みで輝いています。アロンの祝祷で、「民 6:25-26 主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、貴方に平安を与えられますように。」その同じ御顔が、彼らが隠れる理由となったのです。子を愛する親が近づいた時に、まるで、他人の大人であるかのように、理由もなく恐れをなして逃げて隠れる小さな子たちのようです。悲劇です。

イザヤの預言には、「59:2 むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」とあります。主は変わらず良いお方です。慈しみと恵みに満ちています。けれども、人が神に対して罪を犯すと、その罪が仕切りとなるのです。神が人から離れたのではなく、人が神から離れたのです。

9 神である主は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」

この、主の声を、怒った親父のように、「おまえたち、どこに行ったのか！」と怒鳴っているように聞こえているのであれば、それは、まさにエバが蛇に囁かれた偽りです。午前礼拝でお話ししたように、一タラントを主人から受け取ったしもべが、地中にその金を埋めておいて、何の運用もしなかったのは、主人が怖かったからです。自分自身で勝手に、主なる神がひどい方、恐ろしい方と決めつけているのですが、悪魔の騙し手口に、まんまと引っかかっているのです。

10 彼は言った。「私は、あなたの足音を園の中で聞いたので、自分が裸であるのを恐れて、身を隠しています。」

そうです、今、自分たちが裸であることを知りました。これが、善悪の知識の木から実を取って食べた結果です。それまでは、いのちの原則で彼は生きていました。主により頼み、主のことばに、子どものように素直に聞き従う中で、主のいのちが流れていました。そして、裸であるということは、どんなに自分が繊細なこと、私的なことがあろうとも、主にすべて頼り切っているために、守られていたのです。ちょうど、生まれたばかりの赤ん坊が、裸のままで母親の胸に抱かれているようになっています。

ところが今、主から離れて、自分自身で善悪を知ろうとしています。そして、その繊細な部分、け

れども、生んで増えていくための手段ですから、祝福されている部分なのです。それが恥の部分になってしまいました。これが人の悲劇です。神から離れると、自分を守るものが何もなくなったので、恐れに満ちるのです。ヘブル書には、こう書いてあります。「ヘブル 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」

恐れこそが、神の愛から私たちを引き離します。「Ｉヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」そして、恐れによって神から退き、滅んでしまうことを、ヘブル書の著者は話しています。「10:38-39『わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。』39 しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」

2B 責任転嫁 11－13

11 主は言われた。「あなたが裸であることを、だれがあなたに告げたのか。あなたは、食べてはならない、とわたしが命じた木から食べたのか。」12 人は言った。「私のそばにいるようにとあなたが与えてくださったこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」

主が問われた時に、アダムはそのまま、「わたしが、あなたの命令に背いて、実を取って食べました。」と告白すればよかったのです。けれども、彼は、神のせいにしています。女が私にくれたが、その女はあなたが与えられたんですよ、ということです。

ここで分かりますか、アダムは、神によって造られた者であり、神のかたちに造られた者です。ですから、神がすべてのものの第一であられるように、彼は神の前でまず、自分のしていることを明かし、そして神から聞いてくということをしていかねばなりません。それで初めて、女のかしら、つまりリーダーを務めることができます。その神のかたちとしての姿が、すでにここで損なわれています。主の前で、自分を明かしていくのではなく、自分を守ろうとしているのです。自己防衛しているのです。これまでは、主が守ってくださっているのに、その守っておられる方の守りを自ら外して、自分を守っているのですから。

13 神である主は女に言われた。「あなたは何ということをしたのか。」女は言った。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べました。」

女も、蛇が惑わしたと責任転嫁しています。しかし、アダムのように、「あなたの造られた蛇が惑わした」とまでは言っていませんね。しかし、初めに「はい、私は食べました。あなたが命じられたのに、それに背きました。」と告白していません。

アダムも、エバも、罪というものに犯されてしまいました。神から自分たちを引き離す行動に出たので、善悪は自分たちのものですが、自分で神のように動かねばなりません。それはあたかも、幼い子どもが、父母から家でしたようなものです。神のように動こうにも、すでに全く、そのように動いていません。神の愛に留まっているからこそ、恐れから自由にされ、愛によって神の言われていることに従うことができます。しかし、今、神から離れているので、自分独りで動かなければならず、絶えず恐れに囚われているのです。恐れとは、いわば高ぶりです。自分というものを保つために、必死になっているのです。

神がすべてのものの初めにおられる方であるように、人は物事の初めに自分を持ってくることで、つまり責任を果たすことで、神のかたちを保つことができます。自分の事を告白するのは、神を第一に持っていき、そのことで自分が、すべての初めにいることを認め、告白することができるのです。そのリーダーシップ、かしらであることを、罪人は放棄しているのです。

2A 主の呪い 14－19

そこで主は、初めに蛇、次に女、そして最後の男の順番で、呪いを宣言されます。

1B 蛇への勝利 14－15

14 神である主は蛇に言われた。「おまえは、このようなことをしたので、どんな家畜よりも、どんな野の生き物よりものろわれる。おまえは腹這いで動き回り、一生、ちりを食べることになる。

主は、蛇が腹這いで動き回るようにされました。ということは、蛇はこれまでは、腹這いではなかったということになります。その答えが、午前礼拝で学んだ、蛇と竜は同一の生き物として登場するという部分です。海にいれば竜、陸では蛇です。陸においても、竜のように腹這いではなく、時に直立したりしていたのかもしれません。

そして、「ちりを食べることになる」と言われていますが、これは、文字通り塵を食べているのではありません。そのように、這いつくばっているという姿を比喩的に語っています。というのは、ちりを舐めるみたいな表現のように、塵に口をつけるのは、完全に屈服した状態、卑しめられている状態として聖書には出てくるからです。（詩篇 72:9, 哀 3:29 参照）

15 わたしは敵意を、おまえと女の間に、 おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」

ここが、聖書全体の、主の贖いの預言になっています。蛇は、女を惑わしました。そして女から出てくる者たちに罪が入り、死が入りました。しかし、主はその女から出てくる者によって、蛇の子孫の脳天を砕くようにされるのです。ここから聖書では、「子孫」に注目が寄せられます。4 章では、カ

インが生まれた時に、彼がその子孫ではないか？と期待されました。ノアにも期待されます。そしてついに、アブラハムに対して、彼の子孫によってすべての民が祝福を受けるように定められました。そして、ダビデには世継ぎの子が神の国の王、すなわちキリストであることを宣言されました。

ですから、激しい霊の戦いもその子孫に対する攻撃に現れます。ヘブル人の男の子を、ファラオはみなナイル川に入れろと命じます。エステル記でも、ユダヤ民族を根絶する試みがありました。そしてヘロデ大王は、ベツレヘムの二歳以下の男の子を抹殺することを命じました。そして黙示録12 章では、イスラエルを示す女が、男の子を生んだら、それを竜が狙って、食べようとしています。

興味深いのは、ここの「子孫」というのは、聖書では男系です。ここは「子種」と訳して良いところです。種が元々の意味です。ですから、精子のほうなのです。しかしここでは、「女の子孫」となっているのです。それは、イザヤが後に、処女から男の子が生まれ、神はともにいる、インマヌエルと呼ばれると預言しました。男を介さないで、女から男の子が生まれるのです。

そして、女の子孫、キリストは、蛇の子孫の脳天を打ち砕くのですが、その蛇が彼のかかとを打っています。ちょうどこれは、蛇の頭をふみ砕くのですが、最後のあがきでそのかかとを蛇が噛んでいる姿です。それが、キリストの十字架です。サタンは、それで女の子孫を滅ぼそうとしたのですが、いや、それは神の愛による、キリストの流された犠牲の血による、人々の奪還計画だったのです。それで、サタンは人に対して支配する力を失ってしまったのです。

そして「蛇の子孫」とは何か？黙示録を見れば分かるように、獣、反キリストのことです。竜の位、権威、力をすべて与えられ、獣の国を造りました。主イエスは、初めて来られた時、十字架と復活で蛇の力を無きものにされました。そして再び来られる時、反キリストを滅ぼされます。

2B　産みの苦しみ　16

16 女にはこう言われた。「わたしは、あなたの苦しみと うめきを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。 また、あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる。」

女に対しての呪いは、「生めよ、増えよ、地に満ちよ」という、祝福の命令の中に入ります。その出産について、産みの苦しみがともなうことを宣言されました。苦しみの後のいのち、喜びというのが、後のモチーフになります。主ご自身が、ご自分が死なれ、その後によみがえるのを、産みの苦しみに例えられました（ヨハ 16:21）。

もう一つの呪いは、夫婦における秩序の乱れです。ここの「恋い慕う」というのは、自分の所有物にしたいという欲望です。夫に守られ、夫に従うのではなく、自分が夫を支配しようとまでします。けれども、結局、夫が支配することになるのだと宣言されています。夫に妻が愛され、妻が夫に従

うところに一致があり、平和があるのに、夫と妻の競争が起こってしまうのです。

3B　苦しむ労働　17－19

17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い食べてはならないと わたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

人、すなわち男に対する呪いです。まず、何が間違っていたのかをご指摘されています。「あなたが妻の声に聞き従い」ということです。もちろん、妻の言うことを聞くこと自体が間違いではありません。そうではなく、主から語られたことを第一にして、その中に生きて、女に示していくという順番ですが、そうではなく、主の命じられたことより、女の言うことに聞き従ったというところに間違いがあるのです。それは、男が男であること、女のかしらであることを放棄してしまっています。

そこで、「大地は、あなたのゆえにのろわれる」と主は言われます。主はアダムに、土地を耕し、それを守るようにされていましたが、その大地に呪いをもたらします。これまで、良い実が結ばれる木々が生えていたのに、一生の間、苦しまないと食を得られないようにされました。

18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、 あなたは野の草を食べる。

生産性がなくなります。それは、大地を耕して、それで実が結ばれるところが、茨とあざみが生えてくるということです。いのちから離れてしまったので、いのちの流れによって、実が結ばれていくという循環がなくなります。

そこで、イエスが王冠をかぶせられた時に、それが茨の冠であったことを思い出してください。「マタ 27:29 それから彼らは茨で冠を編んでイエスの頭に置き、右手に葦の棒を持たせた。そしてイエスの前にひざまずき、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、からかった。」茨をかぶられることによって、ここでの呪いを受けてくださっているのです。

19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。 あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

私たちの知っている労働は、まさにこれがイメージではないでしょうか、顔に汗を流して糧を得ます。そして、そのまま死んでいきます、大地に帰ります。働いたら引退して、それで終わりだというようなイメージです。ですから、私が、神の国に入っても、私たちは神に仕えるのだというと、ちょっと待って、奉仕はこの地上だけにしてくれ、永遠に神に仕えるのは御免だと思ってしまうのです。それは、罪を犯した後の労働を思い浮かべるからです。しかし、罪を犯す前は、主によって耕し、

土地を守るのは、どれほど充実していたことでしょうか。

そして、大地の塵から取られたから、大地に帰ると宣言されています。これが肉体の死です。初めに彼らは、主が来られたら自分たちを隠したのですが、霊的な死が入りました。ここでは、肉体も死んでいくことになるということです。ですから、人は死ぬようには定められていなかったのです。だから、イエスがラザロの家に来られた時、みなが泣いていた時、主も流れ、憤られていました。なぜなら、死によってどれだけの人に、悲しみ、泣き叫びを、苦しみをもたらしたかしれないからです。それで主は憤られ、ラザロよ、出て来なさいと言われました。そして、コリント第一 15 章には、死は、私たちにとって最後の敵と呼んでいます。ここにある死がなくなることが、神の目的です。

こうして、また大地がのろわれたものとなりましたが、主は、これをキリストにあって回復させることを願われています。まず、アダムの子孫である私たちが、キリストにあって神のかたちに回復することを願われています。最終的に、主が来られて、私たちの体を贖われます。もう朽ちない体にしてくだいます。こうして、栄光ある神の子としてくださってから、主は私たちと共に地上に戻ってこられます。その時に、大地の呪いの束縛が解放されて、栄光の中に入るのです。

それを説明しているのが、ロマ 8 章です。「8:19-22 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。20 被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」

3A エデン追放 20－24

1B 皮の衣 20－21

20 人は妻の名をエバと呼んだ。彼女が、生きるものすべての母だからであった。

ここで初めて、エバの名が出てきました。人は、彼女に「イシャ」つまり、女と名づけていました。今、罪を犯した後に、彼女に対して「いのち（ハバ）」という名を与えています。生きるのは「ハイ」ということを 2 章でお話ししました。同じ語根から来ています。

すべて女から来るものは、いのちがあります。女から来るにもには、ちりから出て来て、ちりに帰るというもろさ、はかなさがあります。また、罪をもって生まれます。ダビデは、自分がバテ・シェバとの姦淫の罪を告白する時に、「私は咎ある者として生まれ、罪ある者として　母は私を身ごもりました。（詩篇 51:5）」と言いました。罪ある者という意味合いもあります。

しかし、同時に、その女から、蛇のかしらを打ち砕く子孫が出てくることも期待し、希望しています。

いのちの主が来られるのです。死の使いである蛇に対して、いのちの主が決定的打撃を与えます。そして、この方にあって、死んでいる者たちがよみがえる希望もあるのです。霊的な死からのよみがえり、すなわち御霊による新生と、肉体の死からのよみがえり、復活です。

21 神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。

神である主ご自身が、彼らが恥として隠していたものを、覆ってくださっています。これが、神の初めの贖いの行いです。罪を覆うこと、これが贖いです。「エペ 1:7 このキリストにあって、私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。」さらに、神の御子キリストが人となられて、その流された血は、覆うだけでなく罪を取り除きます。

彼らの恥を覆うために、「皮の衣」を着せてくださっています。動物の皮ですから、当然、その動物は屠られています。血が流されています。このようにして、自分たちの罪によって死がもたらされたのですが、その代償をこの血が払っていることを、身をもって知りました。今、自分の恥を覆っているのは、まぎれもなく、尊い一頭の家畜の命なのだということです。私たちの罪が赦されていることも、私たちは、さらに尊い、神ご自身のお子のいのちを身にまとっているのです。

2B 東を守るケルビム 22－24

22 神である主はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

主が言われましたね、「人はわれわれのうちのひとりのようにな」ったと。複数の人格のある唯一のお方です。そのひとりのようになってしまった、と言われています。ご自身から独立してしまったのです。アダムとエバが、神の中に留まり、神により頼み、神に守られているという関係ではなくなってしまったのです。

そして、「善悪を知るようになった」と言われています。主だからこそ善悪の知識があるのですが、人が勝手に自分で善悪を判断していくようになりました。だから、人は正しいと思っている時に、思いっきり間違っているのです。しばしば私は、「正しいから、正しくない」と言いますね。自分は正しいと言い張る時こそ、思いっきり間違っているのです。神のみが正しい方で、人はこの方に拠り頼む時にこそ、正しいとみなされるのです。

それで、「今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」と言われています。園の中央にあるいのちの木です。この木から取って食べてしまった暁には、その神と独立してしまった状態で、永遠に生きてしまうことになります。罪のある状態で、

とこしえに生きてしまうことになります。

しばしば、日本の方に、「死んだ後、永遠のいのちが欲しくないですか？」とクリスチャンが尋ねると、「いや、この人生で十分だ」と答える人が多いです。これは真理に近づいているんですね。罪と苦しみの多い自分の人生が、永遠に続いてほしくないと思うから、寿命を迎える人生で十分だと言っています。主は、これに似た計らいで、彼らが、いのちの木から実を取って食べないように配慮されています。

23 神である主は、人をエデンの園から追い出し、人が自分が取り出された大地を耕すようにされた。

エデンの園の外に追い出されます。つまり、神の住まわれるところから追い出されます。そこから、何とかしてご自身の住まわれるところに戻そうとするのが、これからの神のお働きです。これを初めに聞いているのは、荒野の旅をしているイスラエルの民ですが、彼らの宿営の真ん中には、幕屋があります。そこに主の栄光があり、住まわれています。

そして、神殿が建てられ、そして主イエスご自身が、ゲッセマネの園で苦しみもだえて祈られ、父からの杯を十字架で飲み干されました。そしたら、神殿の垂れ幕が上から下に裂け、そして御霊が注がれて、教会という神殿に、御霊が住まわれ、私たちがいるのです。そして、主が戻ってこられて、神の国が建てられて、神殿も再建され、そして新天新地に永遠の住まい、天のエルサレムにおいて、人々が共に神と住むことになります。

そして、エデンの園を追い出されてから、アダムはそこで大地を耕すようにされました。つまり、汗水流して、苦労するような労働です。

24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

エデンの園の東に、アダムとエバがいたのでしょう。なので、その東に、ケルビムが置かれています。ケルビムは、主のそばにいる御使いで、午前礼拝で話しましたが、エゼキエル書でその一人が堕落して、サタンになりました。しかし、他にもケルビムがいて、神の御座で仕えて、また神への礼拝を導き、そしてこのように、神の御座を守る働きもしています。

彼は、「輪を描いて回る炎の剣」を持っていたとあります。エゼキエル書 1 章には、ケルビムの似たような姿が出てきます。そこではケルビムが燃える炭火のような恰好で出て来ています。また、戦車に乗っているかのように、車輪が彼らのそばにありました。

そして、イスラエルの宿営の真ん中にある幕屋、後に建てられる神殿には、ふんだんにケルビムが彫られ、飾られています。至聖所に置かれた、契約の箱の上に乗っている、宥めの蓋には、純金でケルビムが彫られています。幕屋の内幕には、ケルビムが織り出されています。神殿においては、その他に契約の箱の両側にケルビムの彫像があります。さらに、内側の板にはすべて、なつめ椰子とケルビムが彫られています。

さらに、幕屋も神殿も、東から入るようになっています。東から西へ礼拝するようになっています。ですから、ここで「エデンの園の東に置かれた」というのも、大事な方向になっているのです。彼らは東に追い出されましたが、次に主の住まいに入る時には、その東から西へ向かって入るのです。

こうして、創世記の始まりに、すでに人が罪を神に犯した話から始まりました。しかしすでに、神の贖いの話も始まっています。主は、この働きを今も行われています。聖霊によって、私たちは神から離れているのだということを悟ります。そして、神はすでにキリストにあって、贖いも用意しておられるのだということも、示しておられます。闇がありますが、そこに光を神が造られました。どうか、光のところに来てください。